

唐船城築城800年 ～有田のルーツを探る～

2018年（平成30年）は、ここ有田の地を初めて一体的に治めた有田氏が、唐船城を築いてから800年になります。そこで、この唐船城や有田氏についてご紹介します。

唐船城を築いた有田氏は、第52代嵯峨天皇の流れをくむ嵯峨源氏の末裔です。十二世紀後半の平安時代末期、松浦党に連なる源榮が有田を領有し、地名から有田を名乗ったことにはじまります。

唐船城の築城については諸説ありますが、通説では建保6年（1218年）とされており、これより新しい説はないため、少なくとも800年ほどの歴史があります。もっとも当時の城は、戦の際に防御のため数日間立てこもる程度の臨時施設だった可能性が高いため、城と言って想像するような立派な施設ではなかったと思われます。いずれにしても、この唐船城を拠点として、有田氏の治世が続いたのです。

ところが、14世紀後半の南北朝時代になると、理由は定かではありませんが、本家筋に当たる相神浦（相浦・佐世保市）松浦家が唐船城主を兼務するようになりました。有田家累代の家臣が代官に任じられ、城としては継続しましたが、一时有田氏の治世は途絶えたのです。

当時、有力な諸將に囲まれ、各地の小氏族が生き残るのは大変な時代でした。そのため有力な勢力に従い、後ろ楯を得ることが不可欠でした。戦国時代の永禄10年（1567年）には、有馬家の助力を得るため、相神浦松浦家の養子となっていた有馬晴純の

子盛を、唐船城主として迎えます。この盛は有田丹後守と称したことから、再び有田氏による治世が復活したのです。

しかし、それから10年後の天正5年（1577年）には、龍造寺隆信の軍門に下ることとなります。隆信の弟の子信明を盛の養子として迎え、有田氏を継ぐことになったのです。これにより、城主としての有田氏は継続しましたが、有田の領主は龍造寺家になりました。

唐船城主は信明の後、その弟茂成が継ぎました。しかし、龍造寺家から領主を継承した鍋島家の治世になると、神埼に知行地を移され、佐賀に移住してしまいます。これによって、城主としての、有田氏の時代が幕を閉じたのです。そして、慶長20年（1615年）に江戸幕府が制定した一国一城令により、ついに唐船城も破棄されることになったのです。



《唐船城までの有田》

有田町の西半部には、はるか昔の原始の頃より、人々の生活の痕跡が残っています。中尾岳洞穴（盗人岩洞穴遺跡）など国見山麓には生活の拠点としての手頃な洞穴があり、腰岳からは石器の材料となる黒曜石も産出されます。また、坂ノ下遺跡では、木の実などの貯蔵穴群や特徴的な土器なども出土しています。その後、朝鮮半島より稲作をはじめ大陸の

文化が伝わり、貧富の格差が生じたことなどもあり、次第に地域を治める豪族が出現します。古代の有田の状況は今のところはっきりとはしませんが、平安末期から中世頃には、松浦党の有田氏が唐船城を拠点として、有田郷全体を治めるようになったのです。唐船城を中心に村が形成され、周辺には支城を築いて防御が図られました。



～有田郷のあけぼの～
唐船城築城800年記念

平成30年

10月13日(土)～
11月25日(日)